

鷺浦遺跡出土の陶磁器

西尾克己

1. はじめに

所謂「鷺浦古墓」は、出雲市大社町鷺浦116番地にあり、鷺浦港近くの町並みに位置する。鷺浦は島根半島西端の漁村であるが、近世から近代にかけては西側に所在する宇龍港と共に、北前船の寄港地として繁栄していた。また、戦国時代の博多商人神屋寿禎が関わったとも言われる鷺浦銅山跡も近くに存在する。

この遺跡は1890年（明治23）頃に発見された。地元の土地所有者が阿部荒神社跡地に土蔵を建てる折に、地中から多量の古銭が入った壺と鉢、さらに短刀、和鏡（菊花双雀鏡2面）を発見したことによるという（大谷・近藤1971）¹。

その後、出土品は注目されないままとなっていたが、その中の壺と鉢が1970年3月6日付けで大社町の指定文化財（現在は出雲市指定文化財）となった²。これを受けて翌年には、大社町教育委員会の大谷従二氏と島根県教育委員会の近藤正氏により「大社・鷺浦古墓」として遺跡の報告が行われた（大谷・近藤1971）。しかし、遺物の出土状況については、発見から長い年月が経過しており、不明とされている。

壺と鉢については出雲市で預かることとなり、昨年、陶磁器を実見する機会があった。また、報告から既に40年以上が経過しており、遺跡の再評価の必要性も生じてきており、陶磁器を中心として改めて報告することとした。

なお、現時点では遺跡の性格を古墓と断定しがたく、備蓄銭の可能性も指摘されており（村上1976）³、鷺浦遺跡として以下記述する。

2. 陶磁器の概要

（1）壺（図2-1，PL.5-1・2）

完形品で、大きさは、高さ49.2cm，口縁部径14.9cm，胴部最大径36.9cm，底径15.7cmである。口縁部は小さな玉縁につくり，頸部は短い。肩部から胴部にかけて丸みをもち，底は平底である。胎土中には1～2mm大の長石を多く含み，高温で焼き締めている。表面は全体に暗赤褐色であり，肩部から胴部にかけてオリブ黒の自然釉が胡麻流れ状にかかる。形状や胎土，色調等より，信楽焼と判断される。時期は口縁部の形状より，2期新段階（古相～新相）と推定され，16世紀後葉から17世紀初頭に位置づけられる（畑中2007）。

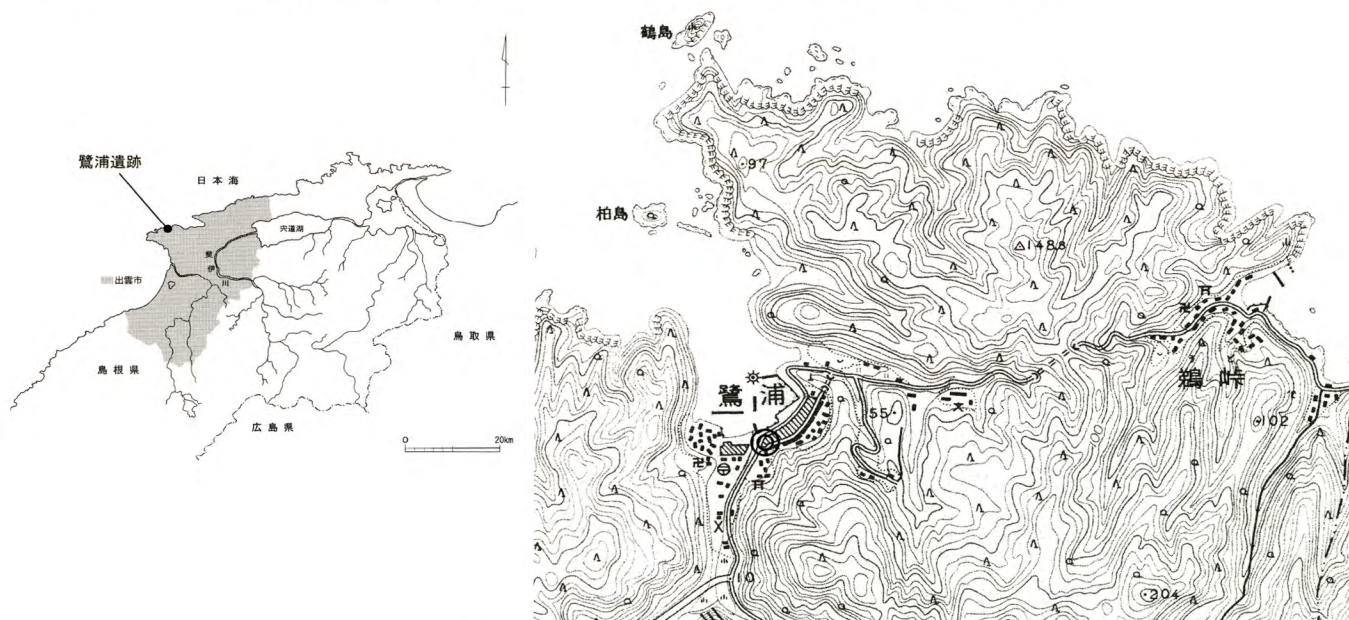


図1 鷺浦遺跡の位置（右1：25,000）

なお、内面の底部付近には、緑青が底面から8 cmの高さまでに点々と付着している。「腐蝕した固まりが一荷もあった」(大谷・近藤1971, 56頁)ということであり、銭貨が多量に入っていたことを示している。

(2) 鉢(図2-2, PL.5-3)

口縁部を半分ほど欠くが、肩部以下はほぼ良好に残っている。大きさは、高さ14.1cm, 口縁部の最大径21.7cm, 肩部の最大径21.5cm, 底部径11.5cmである。口縁部から頸部は、「く」の字状に外に大きく開き、十二弁の花形状につくられている。底部は平底で、径1 cm程の粒状の足が3個つく。胎土は密で、焼成は良く、暗赤褐色となる。口縁部内面と肩部外面には、黄褐色の胡麻がかかる。胎土や色調、および胡麻の状況からすると備前焼と推定される。この鉢は砂金袋といわれるもので、備前焼と丹波焼に類例があり、戦国時代の15世紀末から16世紀前半のものと推定される⁴。この器種は、山陰では初見である。なお、報告では、この鉢は壺の蓋として使用されたと考えられている。

口縁部の断面には、黒漆が塗られている。これは漆継ぎ跡と考えられるが、補修の時期は不明である。また、表面は二次的に煤状のものが着いたため黒褐色となっている。

3. 小 結

鷺浦遺跡出土の壺と鉢の紹介を行ったが、終わりにあたって本遺跡の性格と時期について若干述べてみたい。

報告では、古墓とされているが、前述したように関連する具体的な説明がない。それは、出土品中に鏡と短刀があることから、古墓と考えられたであろう。その後、本遺跡について書かれたものの多くは、古墓として扱われている。しかし、大量の銭が存在していたとすると、古墓にするのは難しい。

銭貨が壺の中に大量にあったことは、底部の緑青の付着状況から裏付けられる。「付着した固まりが一荷もあった」と伝えられているので、緡銭状態で存在したであろう。どの程度入っていたかは、銭が散逸しており確認できないが、報告時には155枚の銭が残っていたという。「一荷あった」とすれば、古墓に副葬された銭貨の出土枚数からみても桁外れた多い量になる(樋口2004, 目次2009)。銭貨の量からすると、備蓄銭の可能性も考えられる。しかし、短刀と鏡が相伴しているので、備蓄銭とも断定しがたい。

遺跡の所在地が港町の中で、かつ、祠跡である点がヒントを与えるかもしれないが、遺跡の性格は、現時点では不明と言わざるを得ない。今後の類例の増加を待ちたい。

埋められた時期については、報告では銭貨の最も新しい「朝鮮通寶」(初鑄年1423年)からみて15世紀前半と考えられていた。しかし、信楽焼の壺は、信楽焼編年の2期新段階(古相~新相)に該当し、戦国時代末頃から江戸時代初頭と推定される⁵。県内出土の信楽焼の壺もこの時期より多く出土している⁶。また、鉢は既に記したように、戦国時代の15世紀末から16世紀前半と推定される。壺より少し古いものであるが、鉢が煤けており、ある程度の使用期間が存在したためと思われる。

上記したごとく、鷺浦遺跡の性格については明確にできなかったが、信楽焼の壺と備前焼の鉢がセットで出土しており、交易や物資の移動を考える上で貴重な資料を提供している。また、島根半島部では数少ない中世遺跡であり、今後とも鷺浦地域の歴史を解明する上で重要な位置を占めているといえよう。

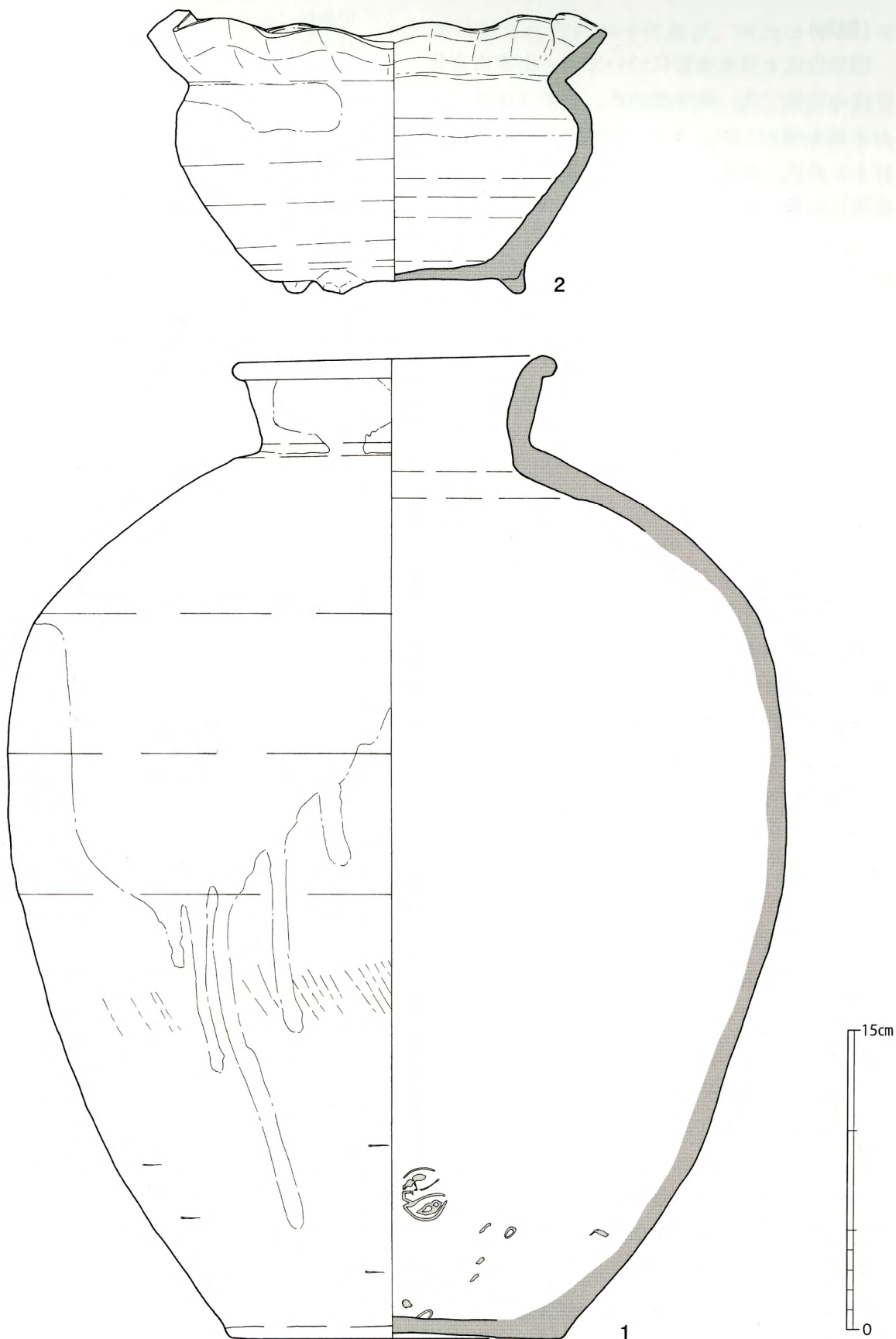


図2 出土陶磁器 (1:3)

(謝辞)

図面作成と写真撮影については、出雲市文化財課の原俊二氏、坂本豊治氏、和田みゆき氏にお手を煩わした。また、陶磁器については、村上 勇氏、乗岡 実氏、畑中英二氏、梶山博史氏に御教示頂いた。記してお礼申し上げます。

註

- ¹ 遺跡の種別を古墓とされているが、根拠については記載されていない。また、短刀、鏡が壺の中に入っていたかどうか確認できない。
- ² 指定名称は「阿部荒神社跡出土品」。『大社町史』(大社町史編集委員会2002)でも紹介されている。
- ³ 鷺浦遺跡については、発見時に腐蝕した銭貨の固まりが一荷もあったとの聞き取りにより、備蓄銭の

可能性に言及されている。また、壺は信楽焼、鉢は丹波焼か、備前焼とされた。

⁴ (梶山2012) 参照。形の祖型は金属製の香炉であり、それを陶器で写したものとされている。これらは関西から中・四国地方の寺院や城跡等から7例(備前焼5例、丹波焼2例)が発見されている。

⁵ (畑中2007) 参照。「壺全体のプロポーションおよび上方に伸びる頸部の立ち上がり方、口縁部を丸く収めている形状から、金山3号窯から中井出窯の頃の窯から出土する資料に類似する」との御教示を得た。

⁶ 信楽焼の壺は安来市の富田城跡関連遺跡群や富田川河床遺跡から多く出土している。また、大田市の石見銀山遺跡でも壺の出土例が報告されている。両地域では、備前焼とは異なり、擂鉢や甕は出土せず、壺に限られている。但し、富田川河床遺跡では鬼桶水差が出土している(守岡2011)。

参考文献

- 大谷從二・近藤正 1971「大社・鷺浦古墓」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅲ集、島根県教育委員会、56～58頁
- 梶山博史 2012「「茶陶」の定義についてーモデルとコピーの視点からー」『備前歴史フォーラム2011資料集 備前と茶陶』備前市教育委員会
- 大社町史編集委員会 2002『大社町史 史料編 (民俗・考古資料)』大社町
- 樋口英行 2004「中世墓出土の銭貨」『山陰の出土銭貨』出土銭貨研究会
- 目次謙一 2009「島根県」『中世の墓と銭』第16回出土銭貨研究会
- 村上 勇 1976「県下の出土陶磁器の調査報告について」『八雲立つ風土記の丘』18
- 畑中英二 2007『続・信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版
- 守岡正司 2011「島根県内出土の信楽焼(予察)」『山陰地方における越前・常滑系陶器』山陰中世土器検討会